

京都文教大学人間学研究所 公開シンポジウム

「生活綴り方から『戦後』を考える －鶴見和子文庫をひらいて－

日時：2007年6月23日（土）

於：京都市国際交流会館

報告1：佐藤藤三郎（作家・農業／山形県上山市在住）
「『山びこ学校』の地で『戦後』農業を生きる」

報告2：澤井余志郎（四日市公害を記録する会代表）
「紡績工場から石油コンビナートまでを綴る」

コメンテーター：

鵜飼 正樹（京都文教大学人間学部文化人類学科准教授）

杉本 星子（京都文教大学人間学部文化人類学科教授）

高石 浩一（京都文教大学人間学部臨床心理学科教授）

あいさつ：樋口 和彦（京都文教大学学長）

趣旨説明：西川 祐子（京都文教大学人間学研究所所長）

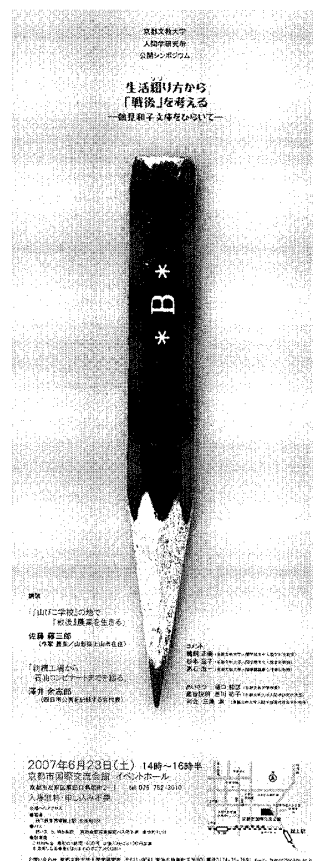
司 会：三浦 潔（京都文教大学人間学部現代社会学科教授）

三浦潔：京都文教大学の三浦潔でございます。
どうぞよろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムは、タイトルを「生活綴り方から『戦後』を考える」と銘打っております。京都文教大学が、先年亡くなりました社会学者の鶴見和子さんが残された文献、草稿、あるいは書籍など、膨大な量であります、これを預かっておりまして、少しずつ研究しております。

鶴見和子さんは、色々なことに関心を持たれましたが、戦後の生活綴り方、生活記録という活動についてとくに大変強い関心を持たれておりました。

本日は生活綴り方と生活記録とを実際に実践されてこられた澤井余志郎さんと佐藤藤三郎さんにお越しいただきましてお話を伺い、そのお話を踏まえて、また皆さんからのご質問をいただいて、議論を進めていきたいと思っております。



本日のシンポジウムは京都文教大学の人間学研究所の主催でございます。コメンテーターを務めます鶴飼正樹、杉本星子、高石浩一はいずれも京都文教大学の教員です。

時間は2時から4時間半まで2時間半を予定しております。お2人の報告者にお話をいただいた後、10分間の休憩を予定しております。

お手元に質問カードを入れておりますので、お2人に対する質問あるいはコメントなどがありましたらそのカードにご記入いただきまして、休憩時間にまわりに立っておりますスタッフに渡していただきたいと思います。

では最初に京都文教大学学長樋口和彦よりご挨拶申し上げます。

樋口和彦：大変暑い中、またお忙しい中、このようにお出ましをいただきまして本当に心から感謝しております。また、遠いところからお2人の先生をお招きいたしまして、このようなシンポジウムが開かれますこと、大変嬉しく思っております。

わたくしどもの大学はご周知のように、まだ10年ちょっと過ぎた新しい、また規模の小さい大学でございます。しかし、小さいけれども非常に大きい気持ちといいますか、射程といいますか、視野というものを持つとうと本日まで努力してまいりました。

特にこの大学の中にありまして人間学研究所という、そういう研究所を創学のときから立ち上げまして、今日まで研究を続けてまいりました。

現在、文化人類学科と臨床心理学科、それから現代社会学科、3つの学科を設けて今日までまいったわけでございます。

みなさんお察しのように今日の大学は今の大学のようには象牙の塔の中にこもって欧米の知識をただ受け継ぐだけ、ということではなくて、足元をしっかりと見て、いったいわれわれはどういう地盤の上に今日まで立っておったかを考え、そこからわれわれの社会というものをきっちり見なければならない時代というものに入ってまいりました。幸い私どもの図書館に鶴見和子先生が膨大な資料と御著書をすべて寄贈

していただきました。この資料は、おそらく我々としては大学が続く限り、これを尊重し、またこれを持ち続け、またこれを発掘して、社会のために、これがなんだったかということを経承し、発表しなければならない使命というものを持っていると私は思います。

このたびこのように生活綴り方から戦後を考えるという形で、シンポジウムをもたれますことを、心から喜んでおります。

「今」という現在からこの社会を見ても、まだ見えてこないものというのはたくさんあります。しかし着実に1つ1つの記録を丹念に掘り起こして、歴史の深みの中に入っていく時に我々が見落としたもの、見えてこなかったもの、そして「今」というものがそこではっきりと見えてくるということがある、というふうに思っています。

このような時に貴重なシンポジストをお迎えしていることを大変嬉しく思っておりますし、私どもの大学がこれからこういう学問的な基礎に向かって社会に対して何かをなすことのできる大学であり続けていきたいと思っておりますので、手違いあるいは準備等において至らない点があるかと思えますけれども、どうぞご容赦をお願いいたしまして、最後まで皆さん、くつろいだ中に、また、すばらしい知恵の交換がされますように、そしてこの研究の成果が上がりますように、心から祈念いたしまして、私の一言の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)

三浦：ありがとうございました。それでは京都文教大学人間学研究所の所長であります西川祐子よりこのシンポジウムの趣旨について話していただきます。ではお願いします。

西川祐子：皆様本日はよくいらっしゃいました。京都文教大学人間学研究所が主催する公開シンポジウム「生活綴り方から『戦後』を考える―鶴見和子文庫をひらいて―」を企画準備いたしました者として、今なぜ生活綴り方、ある

いは生活記録活動を取り上げて澤井余志郎さんと佐藤藤三郎さんのお2人に話を願うのか、簡単に趣旨説明をさせていただきます。

会場にはこれまでの当研究所の色々なイベントにご参加くださいましたなつかしい方々、お2人の報告者のゆかりの方々、この問題に関心を持ってくださった沢山の方々、そして鶴見和子さんのご遺族がお見えになっています。

私たちは学恩に感謝しつつ鶴見和子文庫を開いて、読み始めております。

生活綴り方というのは個々人が生活のありのままを自分の言葉で綴り、それを互いに読み、語ることによって共通の問題を発見し、その問題のよってきたる社会の仕組みまでを見抜く、見抜くだけではなくて自らも責任のあるこの社会の仕組みを変えたい、という運動だったと思います。

書く・読む・語るがいわばその中心でした。このシンポジウムではその書く・読む・語る、まとめて言えば「伝える」といえるかもしれませんが、そのことについて改めて考えてみたいと思っております。

書く・読む・語る、なら、今、私たちも日々行っております。パソコンには特にブログをはじめとする言葉の膨大な量の書き込みが日々行われています。私たちは読みきれないほどの情報を日々受け取っているわけです。

それから、話し、語る言葉も方々から聞こえてきます。私は街中を歩いている時、このごろよく「自分が呼びかけられたのかな」と思って後ろを振り向くことがあるんですけども、振り向いたら、その声は熱心に携帯電話に向かって語りかけています。ケイタイがケイタイに向かって語りかけている。

しかし、言葉がこのように氾濫すれば氾濫するほど言葉が指示するものや、ことの存在感は薄れていく。言葉が伝わらない、さらには自分が生きている感じがしないという声がこのごろしばしば聞こえてきます。

1951年に山形県の山深い、それこそ山元村という名前の村の中学校の中学生たちの文集から抜粋した作文を編集した、無着成恭著『山びこ学校』が出版されました。ここにいらっしや

る、佐藤藤三郎さんもその執筆者の1人である中学生でいらっしゃいました。

「生活綴り方運動」は野火のごとくに広がり、その火付け役を果たした本が『山びこ学校』だったろうと思います。ベストセラーになり、続いて生活綴り方を書くサークル、グループが全国にそれこそ無数に誕生したのでした。

京都文教大学に蔵書を寄付してくださった鶴見和子さんもそのお1人で、自ら『エンピツをにぎる主婦』、あるいは『母の歴史』、『仲間のなかの恋愛』、などの生活綴り方の本の編者になっておられます。また、現在私たちが読むことができる岩波文庫版の『山びこ学校』と、それから澤井余志郎編『くさい魚とぜんそくの証文』（はる書房）の解説者もつとめていらっしゃいます。

澤井さんもまた1951年当時に『山びこ学校』を一度に数冊も購入して、紡績会社で働いている仲間たちとそれを読み、大人の生活綴り方を目指して生活を記録する会、そして後には公害を記録する運動を誕生させてゆかれたのでした。

実は先日、このシンポジウムの準備をするために、本の『山びこ学校』の出版の翌年に製作され、上映もされた今井正監督映画の『山びこ学校』を大学の教室で上映、鑑賞しました。黒白、モノクロのいかにも戦後リアリズムの映画です。

で、終わると学生からあそこがわからない、ここもわからない、そういう疑問がたくさん、というか、感想がたくさん寄せられました。そして討論が展開していくうち、映画のテーマである戦後の貧しさが克服され、自分たちは幸せなんだからそのことを自覚しようという学生が一方にはおり、他方には、あの貧しい時代には生きる目的があったではないか、生活感を持ってないで悩む自分たちは戦後の中学生たちよりも幸福と言えるのだろうか？ 言えない、僕的不幸だって切実なんだと訴えてマイクをはなさない学生がいました。

時間がきたので私は、じゃあ、6月23日のシンポジウムにはこの映画で学級会の司会をしてらっしゃる佐藤藤三郎さんのモデル…あの、

生きていると言ってしまったのですけれども、すみません（笑い）。現在78歳の佐藤藤三郎さんが登壇してお話をなさいますから聞きましょうと言って議論を終わらせたのですが、そう言う学生たちはきょとんとして「うそお！」って言うんですね。で、だってシンポジウムの準備をするためにこの映画を観たんじゃありませんかって言いますと、「でも信じられない」って言うんですね。学生たちは戦後のあの時代と現在がつながっているとは思わないらしい。

確かに一時期を画した生活記録運動は姿を消したかもしれません。しかし個々人が行う生活記録活動はその後今に至るまで続けられている。私たちもやっている。その結果戦後60年の社会変動は、生活記録によって、しっかりと記録されている、というそのことはあまり知られていない、言われていないのではないかな。

そこで今日のシンポジウムの準備作業としては、本日会場でお配りした資料の中に入っていると思うんですけれども、ちょっととり出していただきましたら…「つづけ読み、ならべ読み年表」という題をつけたんですけれども、この年表を準備の1つとして作りました【編注：本号収録の『つづけ読み、ならべ読み年表』を参照】。

佐藤藤三郎さんと、澤井余志郎さんのお書きになった文集、通信、記録集、そして御本を集めて、そのうちのいくつかはロビーで今日展示しておりますけれども、それに基づいて佐藤藤三郎関連年表と澤井余志郎関連年表を作ってみました。その横にさまざまな既成のジャンルの年表を参照して社会変動年表の項目をおきました。

1950年代の生活記録運動の後、それぞれの地で生き、そこでいわば定点観測を続けてこれたお2人の記録のつづけ読みと、ならべ読みを行うことによって、私たちは「社会変動と個人」という永遠の問題を考える、それも個人の側から記録する生活記録という方法についても考えることができるようになった、と思った次第です。

『社会変動と個人』というのは、実は鶴見和子さんの著作のうちでは英語で書かれて、アメ

リカ合衆国で出版され、まだ日本語訳がないために、あまり知られていない本の題名であります。その1つの章が生活記録運動に割かれているんですけれども、ただいま、京都文教大学の学部生、大学院生が中心になってその章を翻訳中であります【編注：本号収録の「第6章 サークル：ある繊維工業労働者ライティング・グループ」翻訳を参照】。

『社会変動と個人』はもともとアメリカの大学に提出し、受理された博士論文でした。

そして副題は「1945年の日本敗戦の前と後ろ、ビフォー・アンド・アフター」とあります。

で、この場合の社会変動というのは、第二次大戦をさすと思われます。しかしその後の20世紀後半には、これに劣らぬ大きな社会変動である日本の高度経済成長がありました。

澤井さんと佐藤さんの生活記録活動は1950年以後、それぞれ工業地帯と農業地帯に分かれて高度経済成長とその破綻という大きな社会変動を観察し、あるいはそれに立ち向かい実にたんと、しかし、実に的確な言葉で変動の跡を刻むことをしたのでした。

佐藤藤三郎関連年表と書かせていただいた項目は、佐藤さんの多数の著作のつづけ読み年表といえるかもしれません。そこには戦後60年を専業農家として、めまぐるしく変化する政府の農業政策に対峙し、あるいは市場経済の先を読み、人口の過疎化によって崩れ行く村落行政を立て直しながら生きる、まさに苦闘の日々がつづられています。これは農業地帯からの報告となります。

その右に澤井余志郎関連年表の項目があって、漁港や荷揚げをする港町であるがゆえに工業地帯となった、四日市からの報告があるわけです。四日市市は20世紀前半から紡織の町だったわけですが、それが1950年代の終わりからは巨大な石油コンビナートの町となり、たちまち海水汚染公害と空気汚染の公害が発生する。したがって澤井さんが日々鉄筆を握ってガリ版印刷で作成なさった記録も、紡績工場と同僚とともにいった『紡績女子工員生活記録集』という前半部分と、もうひとつの後半部分、四日市公害訴訟いわゆる喘息訴訟の影のサポー

ター、ボランティアとして記録した『「四日市公害」市民運動記録集』の2つに分かれます。こちらは工業地帯からの報告です。

佐藤藤三郎関連年表と澤井余志郎関連年表のつづき読み、ならべ読みをすると日本列島全体の都市化が、農村地帯と工業地帯のそれぞれにおいて見事に記録されていく様子がわかります。

農村地帯の過疎をはじめとする問題と工業地帯の公害をはじめとする問題は表裏一体であって、両方が合わさって産業構造の激変と人口大移動を引き起こしたわけです。通説とは逆になるかもしれませんが、移動し、移動させられる行為主体は紡績工場で働く女性をはじめとして、むしろ男性よりも女性であるといえるかもしれません。そして、女性たちがどこで次世代を産み育てるか、によって一つの世代の移動にある決着がつけられるとも言えます。女性は社会全体の少子高齢化の鍵を握る立場にもいます。

そして、ならべ読み年表の右端にある社会変動項目にあげた政治経済、いわゆる政治経済社会的な事件といわれるものは私たち個々人の人生の原因であり、結果である。

年表にありますように澤井さん、佐藤さんはこれまで2度3度とお会いになって、交流を深めていらっしゃるようです。お2人とも鶴見和子さんにお会いになっているそうです。しかし長い年月がありながらお2人が今日のように同じ会場で、同じ聴衆に向かって同時に話されるというのは実は初めてなのだそうです。今日この機会は本学図書館に寄贈されている鶴見和子文庫が結んだご縁で成立しました。

今日澤井さん、佐藤さんをお迎えすることによって私たちはいながらにして戦後60年の空間の広がりや時間の流れを言葉によって伝えられることになります。

願わくは今起こりつつある新たな社会変動に個々人がどう対峙し、これからをどう生きるか、特にこの先21世紀を生きるべき若い方たちに考えていただきたい。

この場を農村地帯と工業地帯の対話の場であるだけでなく、質問表、アンケート用紙の助けも借りて、さまざまな世代の世代交流の場に

したいと切に願っております。

では、よろしくお願いいたします。

(拍手)

三浦：それではさっそく報告に移りたいと思います。お1人目は山形からわざわざお越しいただきました、佐藤藤三郎さんをお願いします。佐藤さん、よろしくお願いいたします。

(拍手)

『山びこ学校』の地で『戦後』農業を生きる 佐藤藤三郎

佐藤藤三郎：ただいま紹介いただきました佐藤藤三郎です。山形県に生まれ、今も山形県の、上山市の旧山元村に住んでおります。むじなもり、といいますが今もタヌキが出て、栽培したとうもろこしを食べられたり、カモシカが山からおりて来て大豆の葉っぱを食べたりするといった、そういう山の中で生活しております。

「生活綴り方から『戦後』を考える」というテーマで話をしなさいと言われてましたが、そんなことをいわれても、私は、考えたことがございません。それで何を話せばいいのかと、昨日から西川先生にお聞きしてるんですけども、私は戦後の自分の村の変化というか、それを話せばコメンテーターの人がうまく教育とかみあわせて考えてくれるから心配ないですよ、といわれました。ま、そういう段取りのようでございますので、まず私からは村の実態というかそのことから、まず話していきたいと思います。

結論から申し上げますと、私の村は今、人口が著しく減少し、大変な状況にあります。澤井さんのところの四日市も公害で大変だそうですが、私のところも別の意味での公害、私はそれも公害だと思っているんですけども、大変な状況です。

くわしく申し上げれば122年続いた村の小学校が、休校になったということです。実際は「山びこ学校」という学校はないんですけども、私の村の学校を山びこ学校と呼んで下さる

人が多くいらっしゃいます。その学校のうち小学校が去年の春に四人の子どもしかいなくなり隣の村の学校に行くようになり、現在中学校だけが残ってるんです。小学校は1年生から6年生までで4人ですよ、それでは学校としての機能が發揮できなくなるということで、隣の村の学校に移りました。

中学校は今9人の生徒がおります。1年生がいなくて2年生と3年生だけなんです。今年1年生であるべき子供がその年、一人も生まれなかったか、それとも生まれたけれども去って行ったのかもしれませんが。ですから今は2年生と3年生で9人だけなのです。

生徒9人にたいして教職員が11人おります。11人の職員がいて9人の生徒に関わっているのですから塾以上に子どもが大事にされる学校です。したがって手取り足取り教えてくれるもんですから、いわゆる、今で言う学力というか、それは県内でもトップクラス。山形大学の附属小学校や中学校などよりも成績がよくてですね、山形県で一番東大に入る率の高い学校は、山形では山形東高等学校というんですけれども、その学校に進むのは山形市内でさえ…学年のうち1クラスの中からトップでないと入れないという学校なんですけれども、そこに私の村の学校からは5人のうち2人も入ったし、また昔は第一高等女学校といわれた山形西高等学校にも、1人か時によっては2人も入るといった、ものすごい学校になったのです。

私は教育委員をさせてもらったことがあるんですけども、そのときに村に若い人を残すには、進学しやすい、志望する高校に進める学校にすることだ、と考えて、一所懸命その努力をしました。昔は山元村のような山村の学校にくる先生は、鳥流しされたんだと言われたものです。ですから管理職に登用されることもありませんでした。それを逆に、山元の学校に来ることによってですね、管理職に登用されるということになれば喜んで、立派な先生がくるのではないかと、教育委員という権限を活用して管理職に毎年のように送り出したのです。もちろんこれは私が送り出したのではなくて、先生方が一所懸命になってそうなったんですけど

も、本当に驚くほど毎年、管理職の先生が出るような学校になったんです。つまりこのように生徒の学力が高まれば先生の存在が目立つし、小さな学校ほどその成果がじかに目に見える、という長所があるということです。そうしてそのようになれば過疎は進まないだろうし、山元のこの村に若い子どもを持つ親が沢山住んでくれるだろうと思っていたんですけども、やっぱりだめでした。そして先ほど申し上げたように村には若い人が住まなくなって、子供もいなくなり、学校もなくなったということです。

明治16年にできた私の村の学校が、まさかなくなるなどということはおそらく誰も考えることができなかったことだと思います。今、90何歳以上の方が山元の村には沢山おります。子供はいないけれどもそういう人が沢山おります。学校の生徒は9人しかいないけれども70以上の敬老会に招かれる方が184人もいます。

そういう村にしている、ということの理由はいったい何なのでしょう。そこで『山びこ学校』ってのはいったいなんだったのかということを考えてみたいと思います。私から見ればただ単に子供の綴り方を集めて出した本にすぎないということになるんですけれども、それがすごい勢いでこの世の中に広まっていった、というのはどうしたことだったのだろうか。

私なりに考えてみますと、無着成恭という先生が師範学校を出て、21歳のときに私たちの学校に赴任し担任をしたのですが、その先生ってというのは、ほんとに、普通の人でなかったんだなと思います（笑い）。普通の人ではないということは、物の考え方が普通の常識的な発想をするのではなくて、自己流というか「自分のモノ」があったということです。

もちろん当たり前でなかったというのは、馬鹿であったということではなくて21才の若さでありながら自己の思想をお持ちであった、ということです。

最初に言われたことで今も忘れないことは、他人のまねをすることではなくて、自分の脳みそで考えろ、と言い、自分の言葉で話せ、ということでした。そしてこのことはしょっちゅう言っておりました。

つまりこのことは、私は高等学校に行ったときに分かったんですけど、日本の学校、そして日本の教育ってのは学校ができたときから、外国の真似事ばかりしていたんだなと気づきました。日本の学者、ここにも学者の先生がいらっしゃるわけですが、日本の学者先生ってのは皆、ヨーロッパやアメリカの受け売りしかしていないんだなということをつくづくと感じました。

例えば私たちは農業高校ですから、ぶどうの勉強などもあるわけです。そのとき、ぶどうって書いたあとに、いかにも「学」があることを見せるかのようにカッコの中にgrapeと書くわけです。そりゃ英語の先生がぶどうのことを、grapeと教えなければならんだけれども、農業の先生がぶどうと書いてから、grapeと書くわけです。

だが、無着成恭先生はまったくそういうことをしなかった。英語ができなかったということも1つの理由かもしれないけれども、まあ、そういうことはしないで、勉強って言うのは、点数をとるためにするのではなくって、生活に役に立つように、そして生活を高めていくような、さらにそれが単なる経済的にだけではなくて、知識的にも豊かな生活ができるようにすること、それが勉強なんだぞ、ということを盛んに言っていました。そしてそのことを自分の思いのままにやったということです。その思いのままにやったということに、全国教育者だけではなくて文学者も経済学者も沢山の人がすっかり驚いたのではなかったか、と思います。

『山びこ学校』という本が出たのは私たちがその中学校を卒業するときの3月に初めて私たちの手に渡ったのですが、それを渡すときに、一人ひとりの生徒に、全部違った、無着成恭先生の言葉でサインして渡してくれたんです。私のところには今もその本があります。そんな自由というより勝手ともいえるような活動が、許されていたという時代的背景があったということもあるんでしょうか。しかし、それにしても誰にもできる技ではなかったと思います。

中学ですから、英語も社会も理科も大きい学校では専門の先生が教えるのだと思いますけれ

ども、私たちは昔の高等小学校と同じように、1人の先生が主要の教科を教えざるを得なかったようです。ですから、英語の先生は私の学校にいなかったから、無着成恭先生にそれも教わりました。ところがこの先生、英語が1番苦手だったんだそうです。それで「英語なんかいでねえかあ」って言うてろくに授業もしませんでした。そしてそれでも通った時代だったので、ですから高等学校に行った人は本当に困っていました。実は、はっきり言いますが、高等小学校に入ろうとしても、落第してしまっただけの人はいらっしゃいます。私は農業高等学校の定時制ですから、悠々と入りましたけれども。まあ、そういうことで、思いのままの教育を勝手にやったということです。しかも幸か不幸か、それを許した校長がおったということです。実は1年生のときの校長先生は許さなかったんで、たいへん校内でも問題があったようです。アカデミックな考え方で硬い先生でしたので、無着成恭先生を大嫌いだったようですけれども、私たちが2年生になったときの校長先生は、息子さん2人が非常に進歩的な方だったらしく、「おやじ頑張れ、おやじ頑張れ」と、無着成恭先生の教育を支持する方らしく、校長もその気になっていたようです。ですから映画撮るときなんかは、自らも出演しています。

本が出たのは3月、そしてもう夏休みのころには映画の撮影が始まったのです。脚本は八木保太郎さんですが、1ヶ月か2ヶ月で脚本を書いてですね、そして今井正監督とかですね、木村功、杉葉子とか、岡田英次とかっていう俳優が秋には来て撮影が行われたんです。

そんなようにして『山びこ学校』はいきおい世間に広まっていったんですけれども、それは先ほど申し上げましたように、今までの教育観念、あるいは文化というものの考え方を、一人の無名な教師がものかまわずにやり通したということです。そしてそれがやれたのは、友人である佐藤晋という無着成恭先生の中学時代の同級生で、とても親しかった人がいるんだけれども、それは無着の特殊な環境があったからやれたんだとよく言っていました。

つまり特殊だっていうのはですね、清源寺と

いう600ほどの檀家がある大きなお寺なんですけれども、その住職に落ち着く人だったということです。

したがって、いわゆる村の顔役、権力を握っている方は、無着から引道を渡される、戒名をもらう人たちであるということです。無着を悪くいうと死ぬときにいい戒名もらえないから、あれに文句をいえないんだよ、と。もしも他の人だったらああしたことをやれなかった、と言っているのを私は聞いたことがありますけれども、それはやっぱりあったと思います。いずれにしても、カリキュラムがあるからそれによって教える、といったことではなく子供の立場に立って授業したということだと思いますね。

それが知的に高い人たちや民衆の中に響き渡っていったのではなかったのかな、と思います。本当にあのころ、私たちが中学生で無着先生に習った昭和23年っていうのは貧しかったです。学校に弁当を持ってこれない子供が3分の1くらいおりました。

そして、弁当を持ってこなくて腹がへるもんですから、「かいこで忙しいからひままけてけらせえ」と先生に言って学校を早退する子どもがありました。午前中で家に帰ってゆき働いたのです。今になって言うんだけど、俺は学校に弁当もっていけなかったから午前中で学校から帰ったのだとはっきりいう人がいました。

今はさきほど言ったような子供はいなくなっただけでも、私が山元学校100年史を作るときに、色々村の資料を調べていたら、私の村で明治以降で子供が生まれた数が最も多い年は昭和3年で96人でした。

96人生まれて、それじゃあその人たちが小学校に入った時の子供の数は、と数えてみたら60人しかいないんです。つまり3分の1が乳幼児のうちに死亡しているということです。小説や物語であるのではないんです。さらには生んですぐ戸籍に届けずに死んだ子供もあったかもしれません。

そうした事実を私は見たことがないですけどね、3分の2しか学校に入らない、6歳以下で…3分の1が乳幼児のうちに死んでしまうという、そういう村だったのです。

私も兄弟が9人おります。そのうち2人が亡くなっています。1人は1番上の姉で、和歌山の紡績工場に昭和11年に18歳のときに行きまして、1年かそこらで体を悪くして帰ってきて、昭和12年の年に死にました。私は3歳でそのときの様子を、すこし覚えております。

姉は集団で何人かの人と一緒に紡績工場に行き、病死したのです。そのことを、母親は涙も見せずに、あれは親孝行だったと言っていました。私はそのことばが今も頭に深く刻まれております。そしてそれを思うたびに熱い涙がひとりでに流れ出るのです。

それからもう一人兄があったんですけど、これは5歳のときにジフテリアで死にました。つまり医者にもかかれなまま死んだんです。だけでも、その他7人全部残っておりまして、上の2人の姉はあまり元気じゃないけれども生きております。

そうした村でですね、いったい子どもたちに何を教えればいいのか、なにを教育すればいいのかということを、子供と一緒に生活して21歳にして無着成恭先生は考えたのです。

ですからやっぱり私は無着先生はすごい偉人だと思うんです。その後色々批判されたこともありましたけれどもですね、「先生、あなたも石川啄木のように26歳で、また宮沢賢治のように若くしてこの世を去れば偉人のままでおれたのだが、長生きしてしまったためにいやなことがいっぱいありましたね。」とからかいたくなるのです。

本当に、21歳にしてあれだけの仕事をやったというのは、かえすがえすもたいしたものだなあと思います。

それで、今また、生活綴り方から、戦後を考えるというテーマで、このシンポジウムをやっているわけですが、私は過去を考えるのではなくて、今のこの教育がかかえる問題を、生活綴り方の教育というものの中で考えてみようじゃないかというようにするのが大切なのではないかと思うんです。が、どうなのでしょう。

先ほどいったように私の村が、なくなりつつある。それより先に、家がなくなっていく。

私の娘も東京におります。息子も山形市の郊

外に出ておりました、その息子には子どもが3人おりまして我が家からは車で15分くらいの所だもんですから、しょっちゅういたりきたりしています。そして親の私が作った米や味噌を運んで食べています。そして今、村に残っているのは72歳の私が、百姓では若い方なんです。

90過ぎて2人暮らし、80過ぎて2人暮らしなんていうのはいっぱいあって、あと10年たったら村がどうなるか、など言わずと知れるところです。人口は今、私が小学生のころの4分の1です。戸数は半分ですけれども。90歳元気でも元気であってこの先がどうなるか案じられるところです。

町に行って、スーパーなどから買い物してきて食べると早く死ぬのかも知れないけれども、うちの村では春は山菜、など自然のものをとってきて生活してるし、自分のうちで作った米を食べているから、長生きする。それは結構なことだが、しかしその先が、どうなるんだろうかというのが心配ですね、それで90歳になったら安楽死ができるようになってかできねえかなあ、なんて村では酒飲みながら話しています。

そのときに山村の農業がどうなるのか。今農業を支えている人は、皆さんもご存知だと思いますけれども、就農している人の平均年齢は71歳です。30や40歳で農業してるのは、果物づくり、それから花卉園芸、あとは酪農と肉牛の飼育をやっている人とかです。その中で一番農業収入の多いのは酪農です。しかしそれでも400頭とか500頭とか企業的に牛の乳を搾っている農家もありまして、そういうのは少し残るかも知れないけれども、全体でみたら、日本の耕地の半分近くが荒れつつあり、特に山の田んぼや畑は耕作が放棄されています。

もう一度繰り返せばそういうところは…私の村だけじゃないってことをわかってください。

そして日本の食糧の、自給率が40パーセント以下になったといわれていますが、まもなく30パーセントになり10パーセントになるかもしれないのです。そうなったときに日本の国はいったいどうなるのかと。真剣に考えなければ

なりません。

私の娘のことで恐縮ですが、彼女は一昨年、アメリカに行って一年ファーマーズマーケットの研究をしてきました。そうしたらアメリカなどではすでにスーパーからモノを買って油で揚げたものなどを買って食べると太ってしまい長生きできなくなるから、というので、自分で作ったものを食べる運動というのが、小さな農家と貧しい生活をしている人たちが一緒になって活動しているそうです（注1）。

もちろん日本にも産直運動というのがありますが、まだそうしたことに深く理解をもっている人は、1割ないし2割までいておりません。8割の人たちが外国から輸入した食べ物に依存しているということです。

そしてそのことによって、どんな体になってしまうのかわかりませんが、とにかく農業問題というのは、簡単に補助金を出すのは農業やっている人を保護することのようにだけ都会の人たちは言いますが、そうではないのです。アメリカの人たちは日本の人よりも先にそのことに気づき、産直運動を活発に行っているようです。

都会の人も、貧しく暮らしている人が沢山いるようです。ですから、都会の人が勝手すぎでだめだなんてことは言いませんが、しかし今、そういう時代に差し掛かっているということ、教育の見地や、あるいは、文化というものの中で考察する、というのがこれからの生活綴り方であり、戦後を振り返りながら「今」をどう考え、何をすればいいのかということの問題として提言し、終わりたいと思います。そうした農業のことを含めてあと1時間ほども喋りたいと思いましたけれども、ここで時間が許さないのでやめさせていただきたいと思います。

（拍手）

（注1）佐藤亮子『地域の味がまちをつくる－米国ファーマーズマーケットの挑戦』（岩波書店、2006年）、佐藤亮子『農業者になるには』（ペリカン社、1999年）他を参照。

三浦：ありがとうございます。つづきまして、澤井余志郎さん、よろしくお願いいたします。

(拍手)

「紡績工場から石油コンビナートまでを綴る」
澤井余志郎

澤井余志郎：澤井です。今佐藤さんの話を聞いていて、さすがだと思いました。実は佐藤さんも私も昨日こちらにお伺いして、ついさっきまで「何を喋ったらいいんだ？」と、ずいぶん2人で悩んでおったんですけども、さすが佐藤さん、原稿もなしにああいう大変な話をされて、さすがだなと思いました。

実は、そういうのも、やっぱり佐藤さんたちの『山びこ学校』があったから、紡績工場のなかで運動が続けられたという決定的なものがあったからで、そういうことについてふれたいと思います。

実はこの会場に、長野県の伊那から4人、大阪から2人、ずっと一緒に「生活記録」の活動をしてきた人たちが来ていますので、「嘘を言うわけにはいかないし困ったな」という話を昼間していました。

まあ、それはともかくとして、なんで紡績工場のなかで、「なんでそういうことを始めたのか？」から始めたいと思います。

まず、このあいだ教育基本法が改正されました。教育基本法というのは昭和24年に制定されたわけですけども、生活記録運動をした仲間たちは、その基本法にもとづいての新制中学の第1期卒業生たちからでした。

私の出身は静岡県浜松市で、中学校は浜松工業学校、しかも紡織科だったわけです。工業学校の中でも紡織科というのはなんというか、機械科とか電気科とかよりもおとる科で、成績なんかもそうです。だいたい紡織科へは、織機を10台とか20台とかを据えつけての織屋の息子が多く入学します。私の家は呉服屋でしたし、兄達は普通中学校でしたから、実業学校の紡織科へ入学するなどということは全く思っていな

かっただけに、小学校6年生の担任教師から願書をもらったときにはがっかりしました。親父が決めたわけです。家に帰って親父に「紡績女工がおるような工場へ働きに行くような紡織科なんかには行きたくない」と文句をいったんですが、「お前の成績なら紡織科だろう」ととりあわないので、それなら、試験を受けにいつて白紙で出して滑ってこようと決めて出かけたのですが、その年は太平洋戦争の始まる昭和16年で筆記試験がなく、口頭試問だけ、それもいい加減な答え方をしたのですが、合格通知がきて、結局は入学しました。小学6年生のとき、クラスの友達が「うちの姉は女中にもつかってもらえなので紡績へ働きに行った」と話していたのが頭にこびりついていて、なんでおれが卒業したらそんな低級なところへいかんなんのか、それこそ前途は暗闇の中学校生活でした。

学校では教室での授業はあまりなく、援農での田植え、草取り、楽器工場のプロペラ製造とか、飛行場での防空壕掘りといった勤労奉仕が多く、4年生になったら親元をはなれて、5年生といっしょに、御殿場の隣町にある富士瓦斯紡績小山工場へ泊り込みの勤労奉仕でした。敗戦の年の3月、付き添いの担任教師から、「4年生も5年生といっしょに卒業することになった。」と告げられ、就職先も告げられた。クラスのはほとんどは、東洋紡、鐘紡、近江絹糸とかへ、2人ないし3人で行くのに、私だけは行ったこともない四日市の陸軍製絨廠へ行け、しかも1人だけです。拒むことはできず、4月に行きました。

就職先は陸軍で、従業員は軍属です。威張っているのは将校です。名古屋や岐阜からも10人ほどいて、入ってまず言われたのは「お前達ほろくに勉強をしとらんだらうから、下手に手を出すな、なんでも知っているような顔をして歩いとれ…」ということです。軍属にも階級があって、私たちは「工員」の一つ上の「雇員」という階級でした。知ったかぶりで歩いておればいいってことですが、こんなことで戦争に勝てるのかなと思いましたが、そのほうが楽だからと、織物工場のなかにはあまり入らず、工場空地で防空壕掘りをしていました。

6月にB29による空襲があって、防空壕でふ

るえていました。少し離れた所に、海軍燃料廠があつて3回目の空襲でやられてしまいました。次は陸軍製絨廠だということで、飛騨高山の近くの村と金沢の隣にある松任町へ機械とともに疎開しました。

昭和20年8月15日の正午に、玉音放送というのがあるからとラジオの前に整列させられました。戦争に負けたということで、これで家に帰れると嬉しくなりました。軍属ですから敗戦とともに解雇となり、浜松の実家に帰りました。

あくる年の2月、陸軍残務整理部というところから、「公用」のはんこをおしたはがきで、「寝具持参で2月1日に陸軍製絨廠へ出頭せよ」の通知がきました。戦犯摘発が始まっていたこともあり、親父が「なにか悪いことをしたのか」と心配しましたが、命令されるまま四日市へ行きました。

製絨廠時代にはついぞ目にすることがなかった大佐の廠長が、日本間の椅子に腰掛けていて「本日をもって東亜紡織泊工場に払い下げをするので、お前達もここで働くように」との命令でした。同期で10人ほどいたなかの2人だけが工場とともに払い下げになったわけです。

工場の機械設備は疎開したままなので、私は、飛騨へ、疎開した機械を引き上げるために、大阪本社の取締役と出張、現地で採用した人たちと半年ほど従事しました。

機械設備が工場で整いだした22年23年頃、大垣工場の女工さんたちが来て、運転をはじめました。擦れているような、自堕落なような女工さんがいて、「だから紡績で働くのはいやなんだ」とあらためて思いました。

ところが、教育基本法ができた昭和24年3月に、新制中学校の第1期卒業生が、集団就職で工場へ来ました。そのなかの人たちが今日この会場に来ているので、緊張するんですが、戦後の新しい教育を受けてきた人たちだけに、それまでの女工さんとは違う、はっきりものを言う、やることもしっかりしている…。そういう女工さんになりたての娘さんたちと接し、正直私は、紡績女工蔑視をあらためるようになりました。この娘らとがんばろうと思いました。

それで最初になにをしたか、ですが、戦後の

解放の喜びだと思うんですが、工場内では三度笠に合羽姿のやくざ踊りとか、のど自慢が盛んでした。いつまでもこんなことをつづけていてもしようがない、なんか新しい時代の文化活動が出来ないものかと、考えました。その頃は、共産党の影響下で、鉄鋼労連とか、国鉄、全通などが、サークル活動を盛んにやっていました。私は、当時組合の文化部長でしたから、そうしたサークル活動があるのを知って、音楽・演劇・文学・映画サークルをつくろうと呼びかけましたら、ずいぶん集まってきました。それぞれ活発に自分達で活動をすすめましたが、2年ほど経ったとき、活動が停滞するようになりました。

そんなとき、さきほど佐藤さんが話されました『山びこ学校』の本が出ました。昭和26年でした。「これだ」と思いました。

娘たちは、伊那谷から、それこそ口減らし、家計をたすける出稼ぎということで、働きにくるわけで、農村のそして家の貧困を背負っているわけです。表面上明るくしていても、貧困にふれたくないと思っています。だからこそ、『山びこ学校』を読んで感心しました。本当のことが書いてあるからで、田んぼや畑が何反あつて収入がいくら、家族が何人、その家の経済状況がわかるわけです。それと比較して私の家もそうだと。だといって16歳の娘が「うちも貧乏だ」などとは言えないで、貧乏を秘めているわけです。

それと、坪田譲治さんが解説のなかで、無着成恭先生の6つの教えを書いていた。「なんでも、なぜ？ と考える人になろう。いいことをすすんでやろう。」などにも感心しました。『山びこ学校』に学んでゆこう、となったのが、この本がでた昭和26年以降です。

その『山びこ学校』を学ぶことのなかで、私たちも『山びこ学校』のように「本当のことを書こう」ということになりました。なにを書くかでは、働きにきているけれどもいつも家のことが気にかかっている、だから自分の家のことを書こうとなり、みんなそれぞれに一生懸命書きました。書いた綴り方を持って集まったとき、「さあ、誰か読んで発表せい」と言ったの

ですが、誰も読もうとしなくて、もじもじしていたので、私は、隣に座っていた娘の綴り方をとりあげて読みました。そしたら読まれた娘は泣き出してしまいました。けれども、ほかの娘たちは、ほっとした顔をしていました。あ、そうか、貧乏だということはそれぞれに思っていたけど、それを口に出さないようにしてきたが、読まれた娘の家も、私の家も一緒だったんだという安心感？ だったようです。

そうしたことがあって、綴り方が提出され、今日もこの会場に来ている三宅（旧姓田中）美智子がガリ切りしてくれ、最初の文集『私の家』が出来上がりました。書いた綴り方を読みあって話し合う、話し合ったことを書く、そうしたルールみたいなことをするようにしたので、『私の家』の話し合いから、「農家を作ったものはじぶんで値段をつけられない、それはおかしいのではないか」「みんなは給料をもらうとまず家への仕送りをする、給料の中には、仕送り分のカネははいってはいない」「家で、貧乏を背負って苦勞しているのはお母さんだ」など、気づいていなかった大事なことが分かって来ました。

そうした綴り方での話し合いでは、文章が上手に書かれているといったことは問題にはしないで、何が書かれているかを大事にしました。

『私の家』の話し合いのなかから、貧乏を背負っているのはお母さんである、私もいずれお母さんになる、だから、お母さんの綴り方を書こうとなりました。手紙を出して聞いたりしながら書いたお母さんの綴り方は『わたしのお母さん』の文集にまとめられました。結婚式当日初めて父さんの顔を見たとか、想像を超えるお母さんの状態を知ることになりました。もっとお母さんのことをよく知ろう、そんなお母さんにならないようにするにはどうすべきか、そうしたことを考えるために『母の歴史』を書こうと進んで行ったんですが、そうすればするほど、知らなかったことが分かればわかるほど、農家の嫁にはなりたくはないとの思いも募りました。

この頃には、ジャンル別のサークルではなく、勤務別（早番、遅番、昼専）のグループ

で、うたごえ、芝居、書くなどの活動をすることに変わっていきました。

昭和27年8月上旬、中津川で第1回作文教育全国協議会が開催されることを新聞で知りました。労組から、私を含め3人が参加、そこで初めて鶴見和子さんにお会いしました。

鶴見さんは、その会での講演で、「自己を含む集団」「集団のなかの自己改造」といったことも話されました。その話を聞いて工場へ帰ってから、仲間内で「集団のなかの自己改造」とと、真意もわからないのに、流行語のように使いました。サークル・グループという仲間意識のある集団のなかで、書く、話し合う、行動することによって成長するという思いがあったことです。

ですから、本当のことを、ありのまま、かざらずに書く、発表するのは、仲間意識に培われていないと成立しません。うたごえや、演劇、リクリエーションなどで新しい仲間が来ても、すぐに生活綴り方は書けません。しばらくすると、仲間の一人が、「もうあの子、綴り方が書けるよ、一度呼んで、綴り方を書くように言うといいよ」と言ってくれます。その段階で、その娘も綴り方の仲間になります。

別に革命集団をつくるつもりは毛頭ありませんでしたが、本当のことを、書けるようになる、書いたものを発表できることは、かんたんではありませんでした。生活綴り方教育では、「概念くだき」を大切にしています。工場のかでの生活記録運動でも、そのことを大事にしました。そうすると会社や、会社の顔色をうかがう労組幹部にとって、こうしたことは、思い通りにならぬことなので、極端に嫌います。

例えば、朝鮮戦争特需で会社の景気がよくなったと、従業員を大量に採用しました。ところが収容する寄宿舍は後回し、寄宿舍自治会や労組が寄宿舍の増築の要求をしても「経済的な余裕が無い」としてはねられました。その頃、労組で平和の作文募集をしました。そのなかに、寮生活のありのままを書いた綴り方がありました。田中美智子を書いたものですが、お化粧部屋まで使い、お部屋はふとんを敷いたら歩く隙間も無い、顔や足を踏んだとかで、争いの

絶え間がない、こんなことで職場の仕事も、平和も保たれるのだろうかといった内容で、この綴り方には、経済的な余裕が無いからではすまされないものがあり、寄宿舍増築をしなければならぬことになり、増築工事がはじめられました。それは良かったのですが、「ああいう綴り方を書かせるようなことはやめよ」と工場長に呼び出され、きついお叱りをうけました。腹の中では、生活綴り方はこういう効用もあるのかと、感心していました。

労組では、破壊活動防止法案反対のストライキを全国的規模でおこなうことになり、労組もスト決行を決めました。さてその日、各職場では、主任が「この部署は仕事が忙しいので仕事」「この部署はひまだからストの大会へ行け」と決めてのスト大会で、「中学校でストライキっていうのは、会社に打撃を与えて労働者の要求を実現する手段であると、教えられましたが、今日のストはどういうストですか」と質問した娘がいて、労組幹部が返答に困っていました。私はその質問を聞いていてさすが生活綴り方っ娘（こ）だと感心しましたが、このときも、労組のことなのに、工場長に呼び出され、なんでストライキをさせるようなことをするのだ、けしからんと、さんざんな目にあいましたが、“このよいもの生活綴り方”の思いを強くする一方でした。

こんなことで、弾圧されればされるほど、このよいもの生活綴り方の思いは増すばかりで、ついには、昭和29年の秋田での作文教育全国協議会に参加したことを問題にして、9月に懲戒解雇になりました。澤井さえ首にすれば綴り方運動は消えるだろうとの企みだったのですが、だからといって消えることは無く、私は外へおん出され自由に振舞っていましたが、工場のなかで頑張ってくれていた、この会場に来ていますが、仲間の中心でがんばり通した三宅昭夫さんは大変だったと思います。

大阪地裁での解雇無効訴訟では、労組幹部も会社といっしょになって敵対し、“「生活を記録する会」は解散せよ”の勧告までだしても、綴り方グループは、鶴見さんが教えてくれた中国の魯迅が許広平に宛てた手紙のなかの“塹壕

戦”——敵が鉄砲をどんどん撃ってくるときには、塹壕のなかでじっとしていて、ときどきこちらも空に向けて鉄砲を撃つ——そんなことで堪え、会社と労組幹部が傍聴席を埋めているなかで、三宅証人は会社の不当性を堂々と証言したし、とどのつまり会社は、綴り方を辞めない人たちを特設した職場に集め、思想教育？を施しましたが効き目がないどころか、仲間の職場だから、優良従業員の同じ仕事の職場よりも生産があがってしまい、会社は大変に困ってしまったことがありました。

会社と労組幹部の次の決定打は、“操業短縮”一時帰休でした。「紡績は操短の歴史でもある」といわれるくらい、生産がダブつくとき一時帰休——半年後に再雇用するとの約束で解雇し、その間、退職をせまり、結局は再雇用されることなく、会社は給料が安上りの新人を採用する——紡績経営者の伝家の宝刀を持ち出しました。労組は「半年後に再雇用する協定を会社と締結してあるから、必ず再雇用される」と言い、「協定書はここにはなく大阪本部にある」として見せませんでした。操短のことは勉強していたので、指名解雇にあった娘たちは、市立労働福祉会館に集まって、籠城の覚悟をしました。

このことを、鶴見さんに電話で知らせたら、すぐに誰かに四日市へ行ってもらうからおとなしく待っていなさいと、夜行で木下順二さんと日高六郎さんのお二人が来られて、会社と労組幹部にあって、「六ヵ月後の再雇用、それと、退職干渉をしない」との約束を取り付け、新聞記者団にその旨発表しました。新聞記事は、労使協定よりも効果があり、ともに操短で帰された人たちのほとんどは退職しましたが、娘たちはみんな元気で復職しました。操短の間に「澤井解雇無効」の判決が出ました。労組本部の役員と結婚した娘からは、「夫は、困った困ったと、頭をかかえています、私は解雇無効の判決が出たことを大変喜んでいます」と手紙をくれました。

判決の報告と今後のことの相談で伊那で話し合いの会をもちました。三宅さんは郵便貯金通帳と印鑑を出し「会社は控訴するだろうから、

この金を使ってがんばってほしい」と言い、娘たちは「工場へ戻ってくるまでは、わたしら結婚せんと待ってるで…」と言うのを聞いて、おれはなんと幸せな男かと思うとともに、この人たちにこれ以上の迷惑をかけてはいけなくと強く強く思いましたから「会社が和解してくれて弁護士さんとかへ話をもってきているので、それに応じようと思うんだけど…」と言ったら、「解雇は無効だっていう判決がでたんだから、もういいよな…」と一人が言い、残念な思いを残しながらも明るく「そうしように」となりました。みんなは世間で言う結婚適齢期を通りこした年齢になっていました。

こうしたことで、結婚、村へ帰ることが現実の問題になりました。生活記録運動をしたばかりに、遅れた村のことがよくわかり、農家の嫁にはなりたくないの思いが人一倍強く思うようになりました。こちらでは、蛇口を開ければ水もお湯も出ます。伊那では雪降りのなか外にある井戸の釣瓶で水を汲まなければなりません。そういう思いのなか、紡績の娘と劇団の役者さんたちとで芝居をつくることになりました。今日この会場に中心になった劇団の羽鳥桂さんがきていますが、台本づくりで問題になったのは、「サークルのなかでの恋愛」と「村へ帰る」ことでした。工場の中で、恋愛・結婚すれば、遅れた村へ帰らなくて済みます。だけど、紡績工場では圧倒的に男子が少数です。サークルの仲間うちでもそうです。恋人組みが3組できました。6人はうれしい毎日ですが、そうでない多くの仲間は面白くありません。いさかもしました。サークルの危機でした。近くの湯ノ山へキャンプに出かけることになりましたが雲行きがあやしく、両者が激突などということになれば、サークルは瓦解します。それは困ることなので、一計をたてました。生活記録運動で大事にしてきた「概念ぐだき」つまり、若者が恋愛することはよいことだ、ましてやサークルの仲間うちで結ばれた仲間を祝福しなければいけない、だけど、結ばれぬ仲間のことも考えて恋愛組みはいまから祝福のこけしを贈るので、男は女の、女は男のこけしを持って二度に一度はそのこけしを見て、会うのを我慢し

てくださいと、みんなの意表をついてのこけし贈りをしました。

芝居ではこのことを出しましたし、村へ帰ることでは、「50年生きるとして、女子労働者として工場で働くのは長くても10年、あとの40年は村で生きることになれば、みんなは労働者というより、農民の百姓娘なんだ。労働者として、あるいは生活記録運動で成長してきたんだから、帰りたいような村にするようにがんばろう」と、「百姓娘」の性格をうちだし、それと「母の歴史をくりかえさない」ように生きようと、芝居の結末は村へ嫁に行った娘の嫁ぎ先へ仲間が訪ねて行って、「20年たったら私の娘が紡績に働きに行く、サークル運動をやるなどとは言わない、母の歴史はくりかえさないよう、私はがんばるのえ…」で幕となる台本がつけられました。これは、生活記録運動の行くべき道筋で、みんなもそう思うだけに、「あーあ、ついに私も村へ帰ることになっちゃった」となりましたが、これはあきらめではなく、決意のことばでもありました。

1960年頃になると、繊維工業は東南アジアとか中国の安い製品におされ、斜陽化していきました。生活を記録する会の仲間も3人だけになりました。その3人は、着物姿で私の下宿を訪ねてきました。「貧乏綴り方なんかをやっていたら嫁の貰い手がないって、さんざん言われたやろう、今日な、私等ちゃんと嫁に行くことになって退職しますって、大事務所にも行って挨拶してきたよ」と、得意げに報告してくれました。それ以前に退職した人たちも、嫁の貰い手がないのではなく、しっかりした旦那さんをつかまえることができます。

みんなが四日市を去っていった頃、四日市では、紡績工場がなくなっていく一方で、日本で最初の本格的な石油化学コンビナートの工場による、くさい魚とぜんそくの公害が発生しました。泊工場の隣にも日本合成ゴムの工場がつけられ、悪臭や爆発事故などで付近住民が困っていました。

こんなとき、生活を記録する会の人たちがいたらどうしたんだろうかと考えました。やはり、

こうしたことにも眼をむけて公害について書く・考えることをしただろうな、と思いましたし、私も、生活記録運動で成長したとの思いが強く、公害への関心を強めるようにしました。

1966年7月、公害認定患者の木平卯三郎さんが、自宅で首つり自殺しました。遺書に「死ねば薬もいらず楽になる」と書かれてありました。

革新陣営の「公害対策協議会（公対協）」は、追悼と抗議の集会を開催しました。そのとき、三重県立塩浜病院の空気清浄病室に入院中の漁師町磯津の中村留次郎さんが、病院を抜け出して集会へ来られ「弱いものは束になって死ねと言うのか」との訴えをしました。その中村さんは、ぜんそくの苦しみを知らない私たちにがまんできないのか、私に「公害反対ってかたんに言うな、公害の本当のことを知った上で言え…」と言いました。「われらは空気清浄病室に入院させてもらっているけど、それでも明け方になるとあちこちの病室で発作をおこして苦しんどる、わしのベッドの横で一晩、そういうのをよう見とれ」と言うので、夕方、35ミリカメラ、8ミリ撮影機、録音機を持って行きました。ところが医者に「この部屋は24人分の空気しか送り込んでいないから…」と断られ、10時ごろ退散しましたが、6室のあちらこちらでぜんそく発作をおこしていました。

空気清浄病室に入院している患者の大部分は、磯津の住民です。磯津の町は、鈴鹿川をへだてて塩浜第一コンビナートに隣接しています。それだけに、磯津は公害激甚地です。海では油くさい魚、陸ではぜんそくに悩まされていても、工場は「うちのせいではない」「うちじゃあない」と公害発生を認めません、市・県も「原因不明」でとりあってはくれません。なんとかしなくてはと、病院へ患者さんに会いに行くたびに思いましたので、あるとき、ベッドの横に酸素ボンベを備え付け、呼吸が苦しい時に酸素吸入をする藤田一雄さんに「世間に訴えたいことを書いてください」と原稿用紙を持参しました。書いてくれた文章をもらって、「おれはなんと馬鹿げたことをしたのか」と恥じ入りました。それにくらべれば工場で、綴り方

以前にやっていたのは、文学サークルでの観念的な、中味のない文章で、訴えが通じてこない作文でした。

それ以後、病院通いのほかに、磯津現地に行って、被害者のみなさんとお付き合いと、公害患者の会の組織づくりの手伝いをしたいと思い、中心人物の加藤光一さんを訪ねました。そしたら、いきなり「帰れ」と怒鳴られました。地区の労働組合事務所に勤めているけど、一市民として公害反対のために運動したくてと言ったんですが、「選挙になると宣伝カーやビラをまきにきて、すぐにも公害をなくすようなことを言い、選挙がすめばビラ一枚まきにこんし、公害もひどくなる一方や、そんな選挙に利用するようなことはしていらん」語気を強めて言います。その通りなわけで、腹の中で「申しわけありません」と、革新陣営を代表して謝り、帰りましたが、公害が激化するなか対岸の昭和四日市石油が大プラントを増設するとの計画を新聞で読んだので、なんとかまず患者の会をしっかりとしたものにしなくてはとの思いがあり、仕事が終わってから、ときどき加藤さん宅に行きました。1ヶ月ほどたってからだと思いますが、「こんど患者を集めるで、おまん（お前）が説明してくれ…」となりました。

その夜、50人ほどの公害患者が集まりました。「この人は市役所の人で、増設反対の署名用紙も役所で作ってきてくれた」と紹介してくれました。おいおいそんなこと言うとは聞いてはいないぞと思いましたが、中味がどうであれ、在所では、学校の先生と役所の職員はその職業だけで信用があるわけで、このさい経歴詐称を甘んじて受けることにし、弁解しませんでした。これも1ヶ月ほどたってから、患者のなかで「おまんは役所の人って聞いたが、そうじゃないやろう」「あれは加藤さんが勝手に言ったことで…」「おまんは、ようやってくれるでな、これからは頼むわ」となり、やれやれでした。

こうして、磯津の人たちと仲良くなっていったので、くさい魚、漁民一揆、ぜんそく、などについて話を聞かせてもらうようになりました。こんなことまで私に話していいのかな、と

いったことまで話してくれましたが、ありのままをガリ版文集にまとめることにしていましたが、仲間うちで問題になるようなことは、名前を変えたり、一人ではなく二、三人に聞いたようにしました。

文集が出来上がって持っていくと、「まあ暇があったら読むわな」と気のない受け答えでしたが、しばらくして訪ねると、自分だけでなく、漁師仲間にも見せたようで、「わしも、けっこういいことを言うとな…」と感心していました。私に話しているときには、無意識のうちに喋っているわけですが、ガリ版とはいえ、自分が喋ったことを文字を通して読むときには、自分は第三者で、客観的な立場にたって読むことになり、自分がけっこういいことを喋っていることの認識、確認をすることになるようです。

原稿用紙を渡して書いてくれと頼んだ藤田さんにも、仲良くなってから、いろいろと話を聞き、ガリ版文集にのせて病院へ持っていきました。写真も撮らしてもらいました。入院している病室は、2階で、道路一本へだててコンビナートの工場がよく見えます。藤田さんは「あその煙突から煙がでると、とたんに発作をおこす」と話してくれました。そこは昭和石油の向こう側にある三菱油化の工場で、呼吸が苦しくなると、ベッドの横にある酸素ボンベの元栓を開けて、酸素を吸います。酸素ボンベの頭を見たら、スリーダイヤのマークのついた三菱油化製のラベルが貼ってありました。「藤田さん、三菱油化なんかにぜんそくにされ、生きるためにその三菱油化が作った酸素で助けてもらうって、皮肉なもんやな」と言ったら暗い表情で聞いていました。藤田さんとは、娘さんだけで、養子をもったら、三菱油化の従業員で、その後に公害裁判の原告に藤田さんはなるわけで、複雑な思いですごしていました。

漁師やぜんそく患者から聞いた話は、磯津ことばで文集にのせました。文集の名は『記録「公害」』で、発行は公害を記録する会と名づけました。会とはいえメンバーは澤井一人で、いわば澤井のペンネームです。私の勤め先の地区労組協議会には、石油化学コンビナートの労

組も加盟しています。そうした労組の会費から給料が出ていることもあっての気遣いと、号の中味によっては澤井では差支えがあり、会であるからには会員がいることを示すねらいもありました。こうしたガリ版文集づくりは、生活を記録する会運動の延長線上のことで、一人だけの文集づくりでも、10人でやっているくらいの力にはなるだろうとの自負がなくてのことです。

そうはいっても、ガリ版の字は、書く人によって違いがあります。私は地区労の仕事でもガリ版文書をつくり、加盟労組に「ニュース」や「要請」などを数多く送っています。公害訴訟前に、霞ヶ浦海面埋め立てと第3コンビナート誘致が市議会で問題になったとき、第一・第二コンビナートの公害がいっこうに治まらないのに、この上、公害発生源を拡大するのは正気の沙汰ではないと、このときばかりは、隣接地区の住民による大反対の動きがでました。隣接地区に居住する組合員から「反対のビラまきをするので、夜に手伝いに来い」というので、行きました。なんのことはない、「お前がいまから原稿を書いて、ガリ切りしろ」で、用意してあったガリバンセットでビラを印刷、9時すぎに、隣接地区の家々にビラくばりをしました。あくる朝、石油労組から呼び出しがあり出かけました。労組事務所の委員長の机の上に、昨夜印刷・配布したビラが置いてありました。「このビラはお前がつくったんやな」「お前はどこから給料をもらっている」「会社が大きくなければ賃金はあがらない、それを何故お前は反対するのか」「お前が地区労をやめるか、うちの労組が地区労を脱退するか、ここで返事をせい」となりました。「両方ともおかしいと思うので返事のしようがありません」と応えたんですが、労組は大会を開催して「脱退」を決めました。しかし、そんなことで脱退したらマスコミの餌食になるだけで、「いつ脱退するかは執行部に一任」でおさめ、脱退はしませんでした。会社が大きくなれば、利益があがれば、賃金が上がるとする労組の考えもわかるので、公害については、以後、黒衣でやることを心がけることにしました。

その頃、二人目の公害患者が自殺するという

悲劇がありました。市議会で市長が平気で「石油化学には公害はありませんと、たびたび申し上げています」との答弁をくりかえしていました。遺書ともとれる日記には「市長、ぜんそくをやってみろ、わかるだろう、公害の影響で死にたくない」と書かれていました。公害対策協議会の運動は、集会・デモ行進と、動員で消化することではなく、草の根の運動は望めなく、裁判をおこせば「公害反対闘争」も「公害患者救済」もすすむだろうとする願望が出て、名古屋の労働弁護団に訴訟を依頼、その一方で支援組織づくりを始めました。

1966年暮れ、弁護団は、「被告は第一コンビナートの六社で、原告は塩浜病院入院中の磯津在住者」との「訴状」をつくりました。この段階で、公害対策協議会の支援団体は崩れていきました。「自分の会社を被告にしての裁判を支援できない」と、石油化学産業労組が抜け、そうした労組が加盟している地区労が抜け、労組を基盤にしている社会党・革新議員団も抜け、共産党だけが残ったが単独ではやれないとして、支援組織は消えましたが、名古屋の弁護士さんたちは、昼間の法廷を済ませ、夜に塩浜病院を訪れ、裁判をおこすこと、原告になることをすすめました。患者達は、「こんな雪の降る夜に名古屋からわざわざやってきて、銭はいらん、委任状に署名捺印するだけでいいなんて…、最初は、この弁護士たちはよっぽど仕事がなく、おいらを利用しにきたなと思った」とあとで言っていました。突然ベッドから転げ落ちて「うー、助けてくれー」って死んでいく患者を、次は俺かなと思う心細さで、親類縁者が「そんな三菱に勝てるわけが無い、負けて財産を無くす、どうしてもやるのなら縁きりする」って言われたけど、おれらはなにも悪いことをしていないのにこんな病気にさせられた、負けてもともと、裁判をやってもらおうとなりました。それで、勝つには証明のしやすい患者9人が選ばれて原告になりました。

支援組織がないなか、提訴はあくる年の1967年9月1日でした。この日のために、公務員労組を中心に100人ほどの動員で、津地裁四日市支部へ原告患者と弁護団が提訴に行くのをみまもり

ました。地区労事務局長は石原産業労組役員でしたが、「あとで報告するから…」と、以後開かれる裁判にも欠かさず出かけました。

裁判はその年の12月1日に第1回の口頭弁論が開かれ、支援組織はその前夜に「公害訴訟を支持する会」として発足しました。高教組の先生などと、会則や入会の誘いちらしなども手がけましたが、支持会の役員として名前を出さずに、運営委員会の事項書を作ったり、夜に名古屋でもたれる弁護団会議に出席して、弁護団と支持会との連絡役にもあたりました。

法廷内の写真撮影は、裁判長などが着席してから5分ほど、テレビ・写真撮影が記者クラブに許可されます。私は、記者クラブに所属しているわけではないですが、記者の誰もとがめだてしようとしなかったのも、記者といっしょに撮影していました。ところが、弁護団から頼まれた書類を裁判所に届けにいったところ、法廷で恐い顔をしてえらそうにふるまっている守衛さんに「なんやあ、あんたは新聞記者とは違うんやな、もう撮影はだめだぞな」とばれてしまいました。

私は、いつのまにか、原告団つきの係りみたいなことになってしまい、「今日は9人の原告さんが勢ぞろいしているので、集合写真を撮りたいから、原告さんに頼んでほしい」で、裁判所裏庭の階段に並んでももらいました。それまで、出廷してもぜんそく発作で途中に救急車で病院へ逆もどりしたり、病状が思わしくなく出廷できなかったりで、この日以外は9人揃うことはありませんでした。私も2枚ほど撮りました。記者クラブの頼みで並んでもらい撮影したのに、その後、テレビ・新聞などで使われる9人の原告団の写真は私が写した写真で、今年判決35周年で使われたNHKのテレビでもその写真が使われていました。四日市公害裁判は四日市だけでなく日本の大気汚染公害を裁き、対策を迫った歴史的な出来事ですが、それをおこした原告患者たちの写真は歴史上記録されているものだと思います。その写真を私が記録しているという事実を、今年も自分なりに重く受け止めています。年令を重ねるにつけ、写真以外の記録文書も含め、私の死後、どうなるのかと考えてたり

しています。写真は全部が公害に関係するとはかぎりませんが、500本近くの35ミリネガと、段ボール箱8箱ほどの文書・印刷物が我が家の物置で眠っています。文書記録は四日市市制100周年記念事業で全20巻の『四日市史』の現代編に使われもし、コピーされたものは四日市市の「公害資料室」に置かれていますが全部というわけにはいきません。

鶴見和子さんが、「記録することは、歴史に通じる大事なことよ」と言われました。「自分が関った四日市の地域史を書きなさい。これは私の命令よ、遺言よ」と晩年を過ごされた宇治市のゆうゆうの里をお訪ねしたときも強く言われました。いまもそのことが気になっています。記録して残していかなければと思っています。

四日市公害の歴史のなかで、唯一、工場誘致を阻止したのは、公害判決の年の1972年6月のことでした。200人ほどの地権者たちのほとんどが、三菱油化の河原田工場建設計画に賛成して田畑の売却を決めましたが、反対地主2名の助っ人依頼に応え、学生主体の四日市公害と戦う市民兵の会が、黒衣で住民運動に加わりました。そのさい、「いまは絶対的に反対派少数で勝ち目はないが、ひょっとして、情勢が有利になってきたら、革新団体が共闘しましょうと言ってきても、ほいほいのったら駄目ですよ。あくまでも住民運動としてやらなければ成功しないから…」と言っておきました。黒衣集団の助っ人も功を奏して、情勢が好転しました。「やっぱり、共闘しようとする団体が言ってきたので、打ち合わせ通り、邪魔されんようにお話しして帰ってもらいました」と知らされました。在所ではよそ者を嫌います。その地域特有の問題であればあるほど、住民主体でなければなりません。ただ、ここでも、ガリ版が問題になりました。最後の決め手となる建設反対市議会請願署名ですが、磯津の人たちも自主的に署名を集めるから署名用紙を届けてくれと言ってくれたので、磯津向きの文言の趣旨を書いた署名用紙を作って届けました。市議会には、2地区からの反対署名が出ましたが、文言が違うとはいえガリ版の字は同じもの、住民だけの反対運動だと

思っていたが、どこかに黒幕がいるようだ、それは誰かって聞いてきたんだけどどうしようかと、現地から相談があったので、印刷を頼んだガリ版屋がいっしょだったとでも言っておいたらと、なんとか難をのがれました。

こうして、四日市で唯一の反対運動の成功をはたしたのですが、一ヵ月後の公害裁判判決後の東京本社交渉で会社は支援団体への「誓約書」のなかに“河原田工場建設計画は白紙にもどします”との文言を書きました。つまり、建設を阻止したのは、口先だけで「反対」を唱えていた公害訴訟支援団体だということに、歴史上そうなります。『三菱油化20年史』にもそう書かれています。闘った住民運動には、そうした文書はありません。

これについては、住民運動に、助っ人した人たちによって、月刊ミニコミ紙『公害トマレ』と、ガリ版文集『記録「公害」』に事実経過と運動の記録が載っていますので、調べれば誰がどう闘ったのかがわかるようになっていますが、そうした事実の記録のないところでは、歴史の偽造が成り立つのかなと思ったりもしています。

ガリ版文集では、被害者の話を聞き、そのまま記録することをしてきましたが、その多くの被害者が亡くなったいま、その話は、証言として残る、いわば遺言でもあるわけです。遺言として残されたものは、あやまちを繰返してはなりません。公害記録資料は受け継いでいかななくてはならないと思うだけに、「四日市公害資料館」があればと思います。

最後に私ごとですが、生活記録も、公害記録も、ガリ版が良く似合うと思っています。私が最初にガリ版に接したのは、敗戦の翌年に、GHQの指示で労組結成が進められ、東亜紡織泊工場でも、工作中にその準備がすすめられ、巡回してくる工場長に「ご苦労さん」と声をかけられ、ガリ切りしてからで、それからだと60年ということになります。

生活記録をはじめたのが、そのあと5年ほどしてからで、文集作りが始まると、夜寝る前にガリ切りしてないときは、なんか忘れ物をしているようなことで、落ち着いて眠れなかった、そ

んなこともありました。

印刷方法・印刷機が変わってきましたが、鉄板ヤスリと鉄筆から、細字ボールペンに代わっても、手に力をかけることには変わりなく、中指の骨がまがったり、ボールペンをにぎると痛みを感じ、ガリ版文集『記録「公害」』は60号でやめました。パソコンなんてやるものかと思っていましたが、手書きが出来ない以上、パソコンでの文書作成に頼るほかに、関係していたシルバー人材センターが高齢者対象のパソコン講習会をおこなうことになり、そこで、なんとか文書作成を覚え、娘がノートパソコンを買ってきてくれたので、キーを片手で1つ1つ打ちながら文章を書いています。できればこれからも手書きのガリ版印刷をしたいとの思いを捨てきれないでいます。ご静聴ありがとうございます。

(拍手)

三浦：澤井さん、どうもありがとうございます。お二人のご報告を聞いたところで休憩に入らせて頂きます。お手元の資料のなかに質問カードがございますので、ご質問やご意見などをお書き頂ければと思います。

三浦：それでは後半のセッションを開始いたします。1人目のコメンテーターを紹介させていただきます。京都文教大学人間学部文化人類学科の鶴飼正樹です。よろしくお願いいたします。

鶴飼正樹：2人の先生方に非常に興味深いお話を伺わせていただいきましてありがとうございました。私はちょうど世代的には、お2人の子供にあたるくらいの年頃で、私の親が昭和5年生まれです。

私は山形県の山元村と言うところには行ったことはないんですが、村の生活は知っています。私は滋賀県の農村の生まれでして、今も自分の祖先という江戸時代からそのへんに住んでいるような所に住み続けているわけです。

残念ながら私の父の場合は、田んぼや畑はあるんですが、祖父の代くらいから自分自身では

耕作はせずに、小作に出すという地主みたいですが、いちおう地主は地主なんですが、大地主というわけではなくて、村の役場の職員をやっていました。実際に田んぼを耕すといったことは私自身もほとんど経験がありません。退職後、父母が自家消費用の野菜等を作って楽しんでいる程度の農家です。農業所得がないので農家とっていいのか分かりませんが、そういったものです。

以上、ちょっと簡単な自己紹介をしまして、今日はお2人のお話に対して、私なりのコメントといいたいでしょうか、感じたことを申し上げたいと思います。

最初にこのシンポジウムを企画した人間学研究所の西川所長が、生活綴り方運動と言うのは、書く、読む、語ると言う事を通して社会の仕組みを見抜いて変えていくことなんだという事をおっしゃいました。

例えば『山びこ学校』、それから澤井さんのされていた紡績女工の『母の歴史』などを少し勉強してきましたけども、やはりそれは確かに社会の仕組みを見抜いて変えていくというところまで射程に入ったお仕事であつたであろうというふうに思っております。

ただその後そういったものがどうなっていくのかということ、例えば子供ぐらいの世代にあたる僕らがまた考えてみますと、僕らが大学生だったのは70年代後半から80年代にかけてのことです。小学校あたりではまだ生活綴り方っぽい作文教育みたいなものは多少受けたような気がするんですけども、大学生になったときには、共に社会の仕組みを見抜いて変えて行くよりも、むしろ自分ひとりだけ社会の仕組みを見抜いていち抜けたというか、抜けた者が勝ちやというような風潮の社会になっていたように思うわけです。

僕らは新人類とか言われた世代です。新人類もずいぶん年をとってしまったんですけども。「集団の中の自己改造」ということを鶴見和子さんの言葉として澤井さんがおっしゃいましたが、僕らは自分1人でも良いから、ドロドロとしたところよりも少しでも楽な道を見つけて、うまく世の中をわたって行けばよいというような

時代の中に、青春というかそういったものをおくった世代であったのかなと思っております。

さらに少し時代を経て、90年代から現在は21世紀に入って、たとえば私の田舎もそうなんですけども、まだまだ私の田舎は京都や大阪までなんとか通勤可能なところではあるんですけども、やはり農業に携わっている人たちは平均70代で、その子供は、僕も含めて、農業とかは一切しないし、共同の道直しや草刈とかそういう作業に参加する程度で、積極的にこれから何かをして行くかという、先が望めない時代になってきているのではないかと思います。

そういう中で、僕たちより下の世代の人たちを見ていくと、僕たちのやっていたいち抜けた、というやり方が決して良いことだとは思わないですけれども、もっと何か違ったものにはまり込んでいるように私は感じられてならないわけです。それは一方で、携帯電話に代表されるように、他者とつながっていたいというような欲望が前面に出てきている。何か非常に安直なつながりを持ちたい気持ちがナショナルリズムみたいなものとつながってきているところに、私としては不安を感じているようなところがあります。

社会の仕組みを見抜いていち抜けた者勝ち的な私たちの世代から見ると、そのつながり方が非常に安易で、その人たちが言っている言葉や考えていることは一見オリジナルで自己主張しているようなんですが、実は自分の考えでもなければ、言葉でもなく、借り物の言葉に過ぎないような印象を、私としては感じられてならないわけです。

お2人から受けたお話の中身についてもう少しコメントしたかったですけども、今のお話を受けて将来、これから先のことを、生活綴り方の意味と関連させて考えてみたいと思うんです。今僕がいったような言い方だと、もう生活綴り方運動、あるいは生活綴り方みたいなものが意味を持ちうるのは60年代か70年代くらいまでで、未来には力を持ち得ないのではないかといいたいのかなと思う方がいるかも分からないですけども、むしろさっきも言ったこと

ですが、今の若い人達のブログなどを見ていると、一見自分の考えで、自分の言葉で綴っているようでありながら、実は借り物っぽくて、借り物っぽいことに自分では気づいてないのではないかなという気がする。そのときにもう一度生活綴り方というものととところ、無着成恭さんの言葉を借りると、自分の脳みそで、自分の言葉で考えろということ、もう一度その原点に戻っていく。そして集団の中での自己改造というか、異質なものと関わったり出会ったりする中で、例えば西川先生のおっしゃったことであれば、書く・読む・語るというサイクルの中で、続けていく。こうした意味で、生活綴り方というのは、今これからまさに必要とされるものなのではないかと感じました。非常に簡単ですけれども、1つのコメントとさせていただきます。

三浦：鵜飼先生、どうもありがとうございます。お2人の報告者のお話と西川所長の最初のコメントも踏まえて、うまくコメントをいただきましたと思います。時間も早めに終わっていただきましてありがとうございました。

続きまして2人目のコメンテーターを紹介いたします。京都文教大学人間学部臨床心理学科の高石浩一です。よろしくお願いします。

高石浩一：どうも高石です。隣におられる鵜飼先生と僕とはひと月違いで同じ年です。ですので体験も全部一緒ですし、そういう意味では時代的にどういう風に生きてきたかもかぶるので、先に言われてしまってびっくり返ってるんですが。

僕はカウンセラーをしています。通常カウンセラーと言うのは自分のことは語らないんですが、今日はカウンセラーとして語ることは求められてないので私自身の体験をお話したいと思います。

というのは私は鵜飼先生もそうですけども、1970年、エキスポ70の年に万博の年に小学校6年でした。それはどういうことかというと、翌年の71年には中学校1年になったということです。私の行っていた中学校というのは大阪

府の高槻市の第6中学校という、かなり変わったところでした。中学校1年のときから無着成恭の名前、『山びこ学校』、生活綴り方運動ということが声高に叫ばれていたところだったんです。今でも覚えてますが無着先生と同じような形で大学を卒業してすぐに赴任された若い先生が僕の担任で、その担任の先生が生活綴り方をしようと。そういう形で言われた記憶は無いんですが、とりあえず学級ノートをつけようみたいな形で言われて、最初に学級通信を作られた。今でも覚えてるんですけども、その学級通信の第一号の一番最初に僕が何で勉強しなアカンねんという文句をタラタラ書いた文章が載りまして、それが僕の生活綴り方体験の第一号なんです。

そのとき担任はウラギシ先生という人で、僕は影でウラギリウラギリと呼んでいたんですけども、その先生と国語のキタ先生。なんで名前まで覚えてるのかわかんないですけども、その2人の先生からとにかく自分の言葉で自分の感じた事を率直に書くんだということを盛んに言われた。その意味で僕はたぶん生活綴り方運動というのが広まって実践されていく継承世代にあたるのかなと思いながらお話をうかがっていました。

その中で、懐かしい言葉がいっぱい出てきました。「集団の中での自己改造」であるとか「語り合う」というふうなことです。当時僕ら自身が何を感じていたかということ、自分のことを率直に語るということを進めていくときに、かなりアンビバレントだった。地域が地域だったということもあります。被差別部落の人たちを抱えていた地域であったし、在日の人たちを多く抱えていた地域であったし、自分たちの友人や同級生が実名を名乗れない現状をどう考えるかとか、部落の人たちを取り巻くこの状況をどう考えるかというのが我々の生活綴り方、通信のひとつの課題になっていて、今でも覚えてますけども、そこで差別者としての自分自身を振り返ろうという、いわばそういう形の集団討議が中学校1年で夜の8時くらいまで行なわれていた。そういうことをお伝えするとかなり変わった学校だったということが分かります。

ます。

ついでに言うと中間テスト、期末テストも無かったです。成績は自分たちでつける。大体僕らは親に怒られへんように4とか5とかいい成績をつけて親に見せてだましていました。そういうかなり特殊な先鋭的なことをやっていた地域の中で生徒として僕らは生きていて、そのときの体験として自分自身が感じた事は何かということ、やっぱり集団の中で自己改造するのは苦しいんですね。どちらかというと自己批判が非常に奨励されるという雰囲気すごくあった。これはそういうところにいたせいかもしれないし、ひょっとしたら生活綴り方というものが抱えている本質なのかもしれません。だけど中学生であった僕たちの体験としては、自己批判をずっとしていると、だんだんみんな暗くなっていったなというのがあります。

このあいだ初期の『山びこ学校』の映画を見せていただいたときに、みんな子供が素直で明るいんですよね。我々と似ても似つかぬ子供たちが描かれていて、それを見ていてなんで僕らとあんなに違ったんやろうなということをや非常に感じました。自分らが抱えていたものと、そしてその前の皆が共通に抱えていたものとの間の世代の違いなのかなと思うんですけども。

そういうことを通じて僕自身が感じたのは、集団そしてみんなで話し合う事の難しさであったし、困難であったし、同時にそこにあって傷ついていくという体験であったと思います。これは正直に今振り返って言えると思います。

その後それでぐっと飛びますけども、時間も無いんで宣伝だけします。ついこのあいだの3月に、カナダにおけるスクールカウンセラーの実践報告を翻訳しました。原題が『Written Paths to Healing』という名前で、訳してしまえば「作文による癒し」、「癒しをもたらす作文指導」というようなタイトルです。これはユング派の心理療法の本ではあるんですけども、学校の先生と心理カウンセラーが共同で子供たちに自分たちの生活をふまえて作文を書かせるという、そういう実践の報告であり、マニュアルなんです。学校という現場の中で、カナダのスクールカウンセラーがカナダの教師と一緒に子供た

ちに作文を書かせる。それがいじめであったり、教室の中の異文化を抱えた人たちの適応を促したり、あるいは家庭で虐待を受けている子たちが自分自身の体験を語るということ、そしてそれを共有・シェアリングしてそしてそれを取り組んでいくという報告がなされているわけです。これを新たにまた学校の中に取り込もうという方向がでてきている。なんで僕がその本を訳したかという、これは僕の原体験であった生活綴り方に対する1つの解決でもあったからです。コントラストというんですか、先生とカウンセラーは、問題提起でとどまらず、僕らが傷ついたところでとどまらず、さらにそれをどうやったら改善できるのかというところまで含んだ手引書みたいな形で書かれているんですよね。これはちょっと今後の参考になるかなと思って非常に印象深く感じました。今の話を聞きながら訳したものの意味をもう一度考えたいと思いました。

1つだけお尋ねできるなら、初期の『山びこ学校』は明るかったんでしょうか。それとも暗かったんでしょうか。そこらへんが僕の中でわだかまりとして残っているの、そのあたりを教えていただければと思います。

三浦：ありがとうございます。今のは佐藤藤三郎さんへの質問だと思うのですが、後ほどまたお2方の報告者にお話いただきますので、そのときにまとめてお願いいたします。どうもありがとうございました。

それでは3人目のコメンテーターを紹介いたします。京都文教大学人間学部文化人類学科の杉本星子です。よろしくお願いいたします。

杉本星子：杉本でございます。よろしくお願いいたします。

お2人がほぼ半世紀にわたって書かれたものを読ませていただき、そしてまた今日のお話をうかがって、つくづく思いますのは、「書くこと」と「読むこと」、そして今私たちが「書けないこと」についてです。『くさい魚とぜんそくの証文』の解説の中で、澤井さんは、聞き取りという形式、つまりその人自身が書かなくて

も聞き書きをとおして、聞き取りをした人も変わっていき、語った人もまた自分が語ったことを改めて見つめなおして変わっていくの、という風におっしゃっています。鶴見和子さんはそれを、生活記録運動を拡大したものであると高く評価しておられます。

私たちは文化人類学を専門にしています。文化人類学では、異文化に入り現地の皆さんのお話を聞かせていただき、それを民族誌にまとめるというのが学問的な1つの方法論となっています。ただ、そのときに私たちは書くことで自分たちが変わり、また書いたことで相手が変わるというところまで、きちっと書くことを意味を理解して民族誌を書いてきたのだろうかと考えこんでしまいました。文化人類学のフィールドワークと民族誌の根幹を改めて考えさせられ、非常にありがたかったと思います。

さて、お2人の凄いところは、ただ書くのではなくて、これはとても大事なことだと思うのですが、「書く」の前に「調べる」が入るんですね。書いて、どうしてだろうと疑問に思ったことを澤井さんも佐藤さんも必ず調べる。公害の実態を調べる。佐藤さんは農業や農村の実態を調べる。そしてまたお書きになる。お2人が書きつづけてきたものは単なる生活描写ではないのです。「調べる」があったからこそ歴史の記録になっているのです。

ではどうしてこのお2人はこれだけきちっと調べてお書きになり、それを続けてこられたのでしょうか。それは、お2人が常に読む人を想定していたからだと思うんです。ですから、お2人の生活記録というのは単なる報告や告白、告発ではないのです。読み手は、お二人のお書きになったものを読むことによって問いを投げかけられてしまう。ですから読者もまたその中で、投げかけられてしまった問いをどうしたらいいか考えていくわけです。そしてまた次に書く。生活記録の「書くこと」というのはそういう投げかけなのではないでしょうか。

そうすると今ここに並んでいるコメンテーターの3人は次に何を書くのかをお2人に問われているのだと思います。書くことをとおして私たちが投げかけることを、フロアにいる

学生たちが受け止めてくれるのでしょうか。次の世代に受け止めてもらえるようなものを書きかけと言われているような気がしています。

それでは実際に私たちの世代は書けるのだろうか、というのが問題でして。最初に西川所長がおっしゃっていたように、現在、私たちのまわりに言葉は氾濫しています。特にインターネット時代になって、ブログやSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）を利用して日記を書くということも、私たちの日常生活の中に入ってきています。でもその中で、私たちは本当に書いているのだろうかということが、今問われていると思います。一例を挙げますと、実は私は京都山城地域SNSという、インターネットを通じて地域の人々のネットワーク作りを目指すグループに入っています。澤井さんをお訪ねしたとき、先ほどの石原産業のこともそうなんです。四日市の公害問題は終わっていない、とコンビナートを前にして澤井さんがおっしゃいました。私は公害の現場で澤井さんのお話を聞きながらそのことをあらためて実感し、そして私たちが余りにその事実が無頓着になっていることを改めて反省させられました。その日のSNSの日記に私はそのことを書きました。その日記にはたくさんコメントがつきました。でも、実はですね、「この公害問題は終わっていない。それに深く考えさせられました。」と書いたことについてのコメントは2、3でした。それ以外の10くらいコメントのほとんどは、私が最後に書き加えた「名古屋駅で松坂の牛肉弁当を買いました。とてもおいしかったです。」と、それまでちょっと暗い話だったので冗談的に書き添えたんですが、その駅弁についてのことだったんです。私はそのコメントを見まして、私が書いたことをたぶんひとりひとりが受け止めてくださっている、受け止めながらも、その重い現実に関する部分にはコメントを書けなかった、松坂牛のところは気楽にパッと書けるので、ともかく読みましたよというメッセージをおくって下さったのだと思ったのです。このたわいもないことしか「書けない」ということはなんなんだろうか。それはかなり深

刻で、本当に私たちはこの問題を考えていかなければならないと思っています。

山びこ学校は生活綴り方を「書くこと」で、貧乏というのは社会制度によって作られていて、たんなる個人の問題ではないのだということに気づいたわけですね。今私たちはバブルが弾けて、やはりある意味の荒涼とした、もうひとつの戦後の風景の中にいるような気がします。そこからふたたび立ち上るためのより所をどこにもとめたらいいか、わからない。ところがそのときに終戦後の生活記録運動のように率直に「書くこと」ができない。前に四日市を再訪された紡織の女工さんが、コンビナートを見て四日市は昔より貧しくなった、それは人間関係が希薄になったからだ、とおっしゃたというんですけども、今私たちが抱えている貧しさはそういう貧しさであって、その貧しさもまた、社会制度の中で作られているんですけども、それが見えない。そういう中で今私たちは書けなくなっているのではないのでしょうか。でも牛肉弁当のことだけ書いていても個人も社会も変わらないので、これから本当に私たちはどうやって「書くこと」ができるのか、あるいは書いて話し合う場を作ることができるのか、書き続けることができるのかということを改めて考えさせられています。大学というのはそうした問題をしっかりと考えていかなければならない場だとおもっています。佐藤さんと澤井さんから受け渡されたものは、とても重いです。ありがとうございました。

三浦：杉本先生ありがとうございました。コメントーター3名からコメントを頂戴いたしました。

それでは、休憩時間に皆様から書いて頂いた質問カードの方に移ります。たくさん頂きましてありがとうございます。ただ、全員の方の質問をご紹介しますわけには行きませんので、西川のほうで読ませていただきまして似たような質問はまとめて、ここで発表させていただき、報告者お二人にそれぞれ答えていただくことにしたいと思います。

また、報告者には、3名のコメントーターの

コメントに対して何かお考えお答えコメントがありましたら、それも合わせてお願いいたします。大体5分程度でお話いただけるかと思います。では西川に代わります。

西川：まとめるどころか、閉会の時間がせまり、うんと短くしなくてはいけなくて申し訳ありません。

質問カードを沢山いただきました。やっぱり世代によってかなりお話の受け取り方が違うなと感じました。例えば「佐藤さんも澤井さんもあのお歳で、すごくエネルギーでいらっちゃって印象的でした。」というのがありました。あのお歳でというと私も近いんですけども（笑い）。これを書いて下さったのは若い方ですね、きっと。

これはさっきの「『山びこ学校』の時、生徒は明るかったでしょうか？元気だったんでしょうか？」という質問に何か似た、共通する感想だと思います。貧しくて、しかし明るい。高齢で、しかし元気なのは何故か、と。

質問と感想をわけることは、なかなか出来ないんですけど、「今、言葉の力が非常に弱くなっている。綴り方の方法は現代にどのように生かせるか？」という質問がたくさんありました。その事をふまえて、先ほどのお話の順番は佐藤さん、澤井さんでしたので、今度は逆に澤井さんへの質問を先にまとめさせていただきます。

「澤井さんのお話は歴史的経過も浮き彫りにされて心に深く染み入りました。」という感想がとても多かったです。

それから、これは別に澤井さんお二人にというよりは自問自答だと思うんですけども、今教育基本法を変えようとしてというか、もう成立してしまっただけですが、教育三法というものは成立して私も年表に書き入れました。「何か戦前に返るような感じます。教育は上から押し付けられたり指図されたりするものではないと思うのですが。そして澤井さんのように弾圧に対して抵抗する力、何が不正かを見極めるその信念はどこから来るのか教えてください。」たぶん澤井さんは謙虚な方なのでなかなか答えてく

ださらないと思いますが、皆さんが澤井さんのお答えをぜひ聞きたいと思っていらっしゃると思います。

また「当時、文化運動は革命あるいは闘争に役に立たない、あるいはなんの役に立つのかという早急な意見もあったと思います。そのあたりのことをお話を聞きたいです。」という質問がありました。「文化サークルとはどんな事をしていたのですか。」という質問もありましたが、それは懇親会の時にどうか詳しくお聞きください。それから「当時のサークル誌には散文よりもむしろ詩が非常に多かったという印象をうけるのですけども、その時に詩ではなくて散文である綴り方を選ばれた理由はなんでしょうか。違いがあるとすれば、それはどういうものであるとお思いですか。」という質問が寄せられています。

「自分の生活を見つける力を次の世代に繋ぐ方法はあるでしょうか。昔は貧しく苦しかったが、今は貧しくないのにあるいは貧しくないから苦しい子どもたちがいるのです。彼らにどういった励ましますか。」という質問がありました。

それもこれも、自問自答を含む問いだと思えますけども、よろしくお願いいたします。

それから、佐藤藤三郎さんに対する質問は色々あるのですが。

「佐藤藤三郎さんは無着成恭さんとの出会いをショックであったと著書に書いておられますが、同じような現状変化の今時期にあると思うんですけども、農をめぐる最近の状況変化の中で、受けられた一番大きなショックについてもう少し語ってください。」という要望がありました。

また、「現在、日本と中国の間では中国野菜の農薬問題、あるいは歴史解釈の問題などのさまざまな事が話題になってますが、中国を訪問された体験もありご本もお書きになった佐藤藤三郎さんは中国を今どう感じていらっしゃるのでしょうか。」という質問もありました。また、「自分の実家も生後9ヶ月までの子牛を育てていますが、外国牛の輸入がストップされてから値段が1.5倍ほど上がりました。」これは育てる

前の買う状況なのかな。「政府が農業の資本主義化、輸入の規制緩和を打ち出していますが、企業化した農家ならまだしも田舎の一農家にはそれに頼るだけの力があるかどうか不安です。長年農業に携わってこられた藤三郎さんはいかがお考えでしょうか。」という質問がありました。

その他にもたくさんあるのですが、若い人からの感想をまとめますと、「あの時代、どうしてああいうことができたのだろうか。先ほどコメンテーターの方もおっしゃいましたけども、他人の問題を自分の問題として考え書き、親身になって議論するということが出来たということは、どうしても自分たちには信じられないし、何故自分たちはそれができないのかについても考えるけども解答が出ない」という感想が多かったです。恐らく年配の方の感想としましては「自分も長年農業に携わってきました。そして村の最後の農業を自分たちが背負っています。佐藤藤三郎さんの話を聞いて、後5年は頑張ろうと思いました。」という感想もありました。

それから佐藤藤三郎さんのお話の中に、今、村に残っているのは高齢者ばかり。そして、高齢者は自分の想いを墓場に持っていくというようなお話がありましたけれども。「かつての『山びこ学校』の力を今の村を再生する力にする事はできないのでしょうか。」私もそうなので、そうだと思うのですが、「老人たち」にご自分も入れていらっしゃるんじゃないかと思うんですが、「老人たちの胸の想いを墓場まで持っていくのではなくって、この世に残したいと思います。」という感想が寄せられています。

以上、感想と質問ですけども、コメンテーターの方の感想質問も殆ど一緒だと思いますので、ご自由にお答えいただければ大変うれしいと存じます。

三浦：それでは澤井さん、よろしくお願いいたします。

澤井：色々質問を頂いたんですが、殆ど私でお答えできるような事はちょっと無理だと思います。

す。ただ弾圧ということがありましたけども、やっぱりそれについて一番印象に深いのは鶴見さんから言われたことで、弾圧を跳ね返すという力はもちろん無いから、耐える中で自分達のやりたい事を通していくということかな、と。考え方によっては狡いやり方かもしれませんが、圧倒的に会社なり労組幹部というのは強いわけですから、そんなのにまともに向かって勝てるわけがないわけですから。でも最終的に勝ったんだと思いますけども、そんなことであります。

後は、私よりは教育委員をおやりになった佐藤さんのほうがお答え出来ると思いますので（笑い）、そちらの方へ。

三浦：では、佐藤さん、よろしくお願いいたします。

佐藤：最初に、今日は言わなかったんですけども私の本を読んでくださった方が、無着成恭先生にショックを受けたと言うのはどういうことだったのかという質問だったけども、私たちは国民学校に昭和17年の4月に入って、その時私の村の学校には有資格の先生がいなかった。資格が無くてもいい先生はいい先生なんだけど、本当に専門の先生では無い先生にばかりに6年間習ってきて、学力って本当に無くって今の私よりも学力のない先生にばかり習ったものですから（会場笑い）、中学1年に入って無着成恭というすばらしい馬力のある人が来て教壇に立たれたときには、こんな人がいるのかと思った。ショックを受けたのは新任の挨拶だったんですね、演説を始めたんです。だいたい普通の先生は「私はなにになにと申します、よろしくお願いいたします。」そういつてしゃべるのが普通なんですけども、「占領政策の中での日本の今の教育ってのはこういうものだ。」ということでGHQ批判をばんばんやったんですね。それを聞いた時に、校長はじめ他の先生方もあつけにとられていたんですが、生徒の私たちもそれにはあつけにとられるほど大ショックだったんです。そのような事が教室の中でも次々と繰り返された。文章の話もしたけども文章力が子ど

もにどうして無いのかって言うのは、大体先生にないからなんですよ。だから無着成恭さんは文章は書くし短歌ではなく俳句はやるし、学生俳句連盟の会長だったと言うので先頭にも立ったという稀に見る人だったんですね。それに大きなショックを受けたって言うのはこういう意味です。

それから農業問題といいましたけども、今中国から野菜が入ってきてますよね。その理由はアメリカ・カナダが色んな穀類を中国に売っているもんですから、中国の農家は穀類では生活できなくなって野菜に変えて日本に出しているというわけです。検査の結果、どんどんと中国の野菜からは農薬の強いものの例が出ているという事が報告されているんです。やっぱり中国の食べ物というのは危険だというふうなことで私も思ってるわけです。できるだけ外国のものは買わないようにひとつ気をつけていただきたいという風に思います（会場笑い）。

それから、最後の農業になるのではないかとということで、それは大問題で。戦後の最後の農業にならないようにはどうするかということではですね、今日本の農水省は盛んに集落営農とか、または農地の流動化という、誰でも農家以外の人でもすぐに農業ができるようにというので農地法を変えて、土建屋さんにでもやらせたらいいんだよと株式会社の投入という言葉を使っていますけども、そういう風にやろうという動きがあります。

そうなった時に、じゃあ今より日本の農業が発達するかという私はしないと思います。つまり野生の産物ができる場所ができる場所ではできるとは思いますけども、先ほども申し上げましたように日本の高地の40%が山中山間地にあるということで、そういうところでなくて場所のいい、例えば山形県の庄内平野や置賜盆地などのいいところは企業がやるでしょうけども、私の村のようなところはますます荒廃していくだろうという風に思います。

したがって、効率のいい農業をするということは農薬に依存するという事につながっていきますので、恐ろしい事だと思います。ですから私が生きている間だけでも安全なものを食べる

ために農業をやっていくよというような自給的な、あるいは最近「農業兼業」と考えたらどうなんだと。学校の先生も勤め人もみんな夕方はやく5時まで、今だったらまだ2時間働けるから、帰ってきて7時まで明るいから田畑で働く。朝になって5時におきれば7時まで2時間働けるし、そして自分の作るもの自分の食べるものを安全に食べるくらいの、そういう覚悟が無ければ恐ろしい事になっちゃうよと私は今本気になって考えております。

それから最後の質問。これは難しいんだ。『山びこ学校』の教育というか、無着成恭先生の教育というものが何故この村に広がったのかというのを一生懸命調べようとする学生が毎年1人くらいきます。大学院の学生が論文を書きたいというので。私はどうぞ書いてくださいと頼んでます。私も分からないことだから、あなたが一生懸命勉強して書いてくださいというんですけども、大体途中からあきらめて帰っていきます。つまり、1人の教員がひとつずつの村で頑張ってもオーストラリアの肉の輸入を食い止めることはできないということなんですね。それを食い止めるためには、もっと先ほど私が行ったような形で、自分の命を守るためにどうするかと。そのためには安いものを食べて命を守るというの也有ありますが、そんな貧乏根性出さないで自分の最も高いものを食べると、食べ物には最もたくさんお金を出すと、この気持ちが無ければ日本では農業はなくなると思いますよ。

大体みんな安いもの安いものといってあさってですね、自給率を高めないとけないと一生懸命言ってるようなやつに限って、スーパーに行って一番安いものを選んで買ってくる。そして脂ぎって揚げたやつ食って。温泉に行ってみますと殆ど肥満体の人ばかりなんですけども、こうなれば日本の農業は終わりだとそのおなかを見ながら、私はつくづく思います（会場笑い）。まあこれぐらいでいいわな。そんなことで。

三浦：あの、佐藤さん、先ほど高石コメンテーターから「当時明るかったのか」との質問がありました。高石先生が中学生のころ経験された

ときは非常に暗かったが、『山びこ学校』の映画を見ると非常に明るいと。当時はやはり、中学校は明るかったんですか。

佐藤：明るかったって言うか、先生が生徒と一緒に遊んだという事です。弁当食べるにしても、職員室で食べないで教卓の机に座って中ぐらいの弁当持ってきて生徒と一緒に、お茶ではなく水を飲みながらという生活をしたということです。そしてまた、昼の時間は『風の又三郎』読んでくれたり、水戸黄門ではないな、吉川英治の『宮本武蔵』を読んでくれたりとね。何かそうやって生徒と一緒に遊んだという事です。祭りになるともうみんな祭りのほうが面白いんじゃないかという事で、白鷹山という私のところに、有名な健康の神様なんていうのがあるけど、そこに遊びに行こうかって事で栗拾い行ったりワラビ採り行ったりキノコ採り行ったりしてね、先生と遊んでばかりだったというですね。だから私は学力付いてないけども明るかったんじゃないでしょうかね（笑）。

三浦：佐藤さん、どうもありがとうございました。

それで、報告とコメンテーターのコメントとそれからフロアの方からの質問にお答えをしていただきました。予定はだいぶ遅れているんですけども、最後に総括という形で西川のほうから締め括らせていただきます。

西川：総括ではないんですが、先ほど佐藤藤三郎さんが挑発をなさいました。つまりタイトルはいけないんじゃないかと。「戦後を考える」って過去志向であって、っておっしゃって。確かにそのとおりだと思います。ただ、私たちがこのタイトルを掲げたのは、あくまでも現在と未来を考えるためです、と申しあげたい。

今私たちが失っているのはやっぱり歴史から学ぶ姿勢だと思います。その昔、歴史優先の、歴史学が学問の中で一番勢いのあった時代に学生生活をおくったものとしては、今本当に時間軸がおろそかにされていて、やはり今ここに、私たちは何故ここにいるのかを考えることを忘れていて。考える暇もない。この状況を変えなければ、と思います。「つづき読み、ならべ読み年表」の佐藤年表と澤井年表、農業地帯からの60年の報告と工業地帯からの60年の報告を並べてよく考えてほしい。産業構造の変化という社会変動が個人の移動を支配している。移動する個人は、しかし、それぞれ移動の意味を考えている。澤井さん、佐藤さんにならって、考えたことを言葉にしましょう。

若い方に申し上げたい。佐藤藤三郎さんはみなさんに挑発をしました。澤井さんの報告もまた、おだやかな言葉でなされた挑発です。私自身も含めた年長者たちは、今必死になってこれからどうするんだ、って皆さんを挑発してるんです。だって高齢者と若者は共に「今」を生活しているのですから。その挑発をどう受け止めるか考えてください。以上です。

三浦：ありがとうございました。まだまだ伺いたいことは山ほどあると思います。ただ時間は16時30分を終了としておりまして、残念ながらシンポジウムはここで終わらせていただきます。

この後、この会場を使いまして懇親会を開きたいと思います。佐藤さん、澤井さん、それからコメンテーター3名の方に残っていただきます。もしもよろしければこの懇親会にもご参加いただけたらと思います。それでは、本日の公開シンポジウムはこれで終わらせていただきます。